

共生社会を作るために

3年2組4番 大石航平

Keyword: 「共生社会」「多様性」「バリアフリー」

1. はじめに

私がこの共生社会をテーマに探究を進めていこうと思ったきっかけは、世の中にはさまざまな心身の特性を持つ人がいるので、それぞれの人達が互いに暮らしやすい社会を作りたいと思ったからである。例えば、高齢者や障がいのある人、外国人など世の中にはいろいろな人がいる。それはいわゆる普通の人にとっても同じことが言えるだろう。人それぞれ価値観は違うから、違う価値観、考えを受け入れ共に生きていけるようにしたい。またいざとなった時に支え合える関係性を普段の生活から地域で作りたいと思ったのも理由の一つである。今後30年以内で高確率で起こると言われている南海トラフ地震などの災害の時や普段の生活で何か困ったことがあった時に助け合える関係を作っていきたい。全ての人が支え合いながら生活していける社会形成をしたい。

2. 序論

では、実際にどのようにしていけば、共生社会というものを創ることができるのだろうか。実際の先行事例を調べてみた。すると奈良県生駒市萩の台住宅自治体で「こみすて」という事業が行われているのが分かった。「こみすて」というのはコミュニケーション・ステーションとごみ捨てというのを組み合わせで作った名前のようだ。では、「こみすて」というのは一体なんなのだろうか。これはごみ捨てを通して、地域のつながりを作ろうという事業である。ごみ捨ては日常で必要なことであり、それを活かしてまちづくりをしようとしている。具体的な内容は、自治会館の前に、ごみ箱を設置しておき、住民がごみを捨てに来る。その時に、コーヒーを飲めるようにしたり、定期的にイベントを開催したり、子どもスタッフを募集したりするなどして若い世代から高齢者まで、世代を問わず地域の住民の交流を深めているということだ。最初は地域にただごみ箱ができるだけではないかという反対意見もあったそうだが、実際に参加して住民同士の交流が深まったなどのいい意見をいただいたりして、今後も続けていく事業にしていきたいということだそう。

この先行事例を見て、やはり何か気軽に行けて、今まで知り合っていなかった住民と交流を深めていく場所やイベント作りが共生社会を作っていくうえでの第一歩となりそう。住民同士が会って、その場で終わるのではなく、今後も長い間続いていくようにそんなきっかけ作りができる場所をまずは行政などを中心に提供して、その後住民同士で運営することができるようになれば、共生社会の実現へ大きく近づいていく事となるだろう。その実現のために、実際に生駒市主催の「いこま未来lab」というイベントに参加させていただいた。そのイベント活動を通して、共生社会を作っていくために実際にできることや考え方などを学ぶことができたと思う。また他にも野球部の活動や「ならism」といったイベントにも参加させていただき、探究活動を進めていくことができた。その経験を本論で述べていこうと思う。

3. 本論

序論で述べたように、探究活動をしていく中で、私は「いこま未来lab」という生駒市主催のイベントに参加させていただいた。このイベントは生駒市を舞台に地域の学生達を中心に、地域共生社会を作っていけるようにするというものである。具体的な活動内容として

は、生駒市のしおのめハウスという民泊施設で生駒の魅力ポイントについてディベートをするというイベントを開いた。参加者は生駒市在住の人達を中心に、学生から年配の方までさまざまであった。参加者からは「今まで知らなかった人と知り合いになれて良かった」「地域の人達と自分の地元について語り合うことができている機会になった」というような声をいただいた。このイベントを通して人との出会い・交流というのはとても大事なことで再認識することができた。このイベントは地域の人との繋がりを今後も続けていく上での基盤となるものにすることができた。また自分自身も新たな繋がりを持つことができた。共生社会を作っていく上では異なる考えや価値観を受け入れることも大事だと思う。私は野球部に所属していたのだが、障害のある方々で結成されたソフトボールチームと交流させていただく機会があった。その時感じたのは、健常者と接している時と変わらないし、面白くて楽しい人が多いと思った。この機会を通して他者を受け入れること、すなわち心のバリアフリーが共生社会には大事だと考えた。障害のある人や高齢者の人達と関わる機会を設けられるようにすることも必要なことだと考えた。また二年生の一月末に「ならism」というイベントにも参加させていただいた。その時に感じたことは、このイベントは直接、社会福祉や地域共生社会と関わりがあるイベントではなかったのだが、自分よりも年上の大人の人達や、逆に自分よりも年下の中学生達と社会のあり方や社会の課題について話すことで、今までに無かった視点を得ることが出来たり、自分とは違う考え、立場の人からの意見を聞き入れることができた。この経験は共生社会を作っていくための他者の立場になって考えるということに活かしていくことができると思う。

↓実際のイベントの様子(いこま未来lab)



(オリエンテーションの様子) (生駒のおすすめスポットについてプレゼンしている様子)

4. 結論

これまでの探究活動を通して、共生社会を作っていくには、まず人と人とが関わり合える環境を作っていくことが大事だと思う。今まで知らなかった人でも関われば、今後も続いていく関係を作ることができると思う。そして他者を尊重して、他者の考えや価値観を受け入れる姿勢も共生社会を作っていく上で、必要不可欠なことだと思う。今後数十年の間に間違いなく起こると言われている南海トラフ巨大地震を始め、火山、台風など日本は世界の中でも有数の災害大国である。そんな日本で生きていくには地域単位での関わりが、非常に重要になってくると考えた。

5. 終わりに

探究活動を通して、この探究を始める前から共生社会を作っていきたいと思っていたけれど、ますますその必要性が分かたり、実際にイベント活動などを通してこれまでにすることの無かったような経験や今までに考えたことが無いような考え方や価値観を得ることができたり、実際にどうやっていったら共生社会の実現に繋がっていくのかなどが分かった。また視野が広がり、多様性を受け入れる心を得たり、人との関わり方を考えることができるよ

うになったと思う。今後も、高校生の間だけの探究活動で終わるのではなく、探究活動でお世話になった方々との関係を今後も繋げていながら共生社会を実現するために、自分にできることを考えながら生活していきたい。

6. 参考文献

<https://suumo.jp/journal/2021/02/23/178470/> suumoジャーナル(2021)著者 嘉屋恭子
閲覧日2024年6月21日